# 地章のひざき

## 一和歌山県内文化財調査報告会 2022一報告資料集



寺内 18 号墳 土器埋納遺構



寺内 18 号墳 円筒埴輪

- ●「入郷遺跡の発掘調査 ー中国製磁器の出土する中世集落跡の調査ー」
- 「岩橋千塚古墳群 寺内 18 号墳一発掘された前方後円墳の埴輪列と土器埋納遺構一」
- ●「小浦 I 遺跡及び小浦 II 遺跡の発掘調査 ー製塩土器と土錘を中心に一」
- ●「社殿にみる神社創建と熊野信仰の歴史 ー鬪雞神社の建造物修理ー」

## 令和5年2月26日(日)

主催:公益財団法人 和歌山県文化財センター

会場:田辺市文化交流センターたなべる大会議室

## 開催にあたって

『地宝のひびきー和歌山県内文化財調査報告会 2022-』は、文化財に対して共通の理解と知識を育んでいただき、県内の発掘調査の成果などを県内の文化財担当者が報告し、その成果をいち早く県民の皆様に提供することを目的として企画したものです。県教育委員会や県内各市町村の文化財担当者と連携し、第1回目を平成18年度に開催して以来、今年で17回目を迎えることができました。今回は、4件の報告と3件の誌上報告が各文化財担当者からされます。県内では、本誌に掲載できなかったものの、多くの発掘調査や建造物保存修理が実施されており、その一つ一つが地域の歴史を知る貴重な手がかりとなっています。今回開催しました本報告会を通して、少しでも文化財を身近なものと感じ、また文化財の保存や活用についても考えをめぐらせていただく機会にしていただけたらと考えています。

最後になりましたが、この報告会を開催するにあたり、ご協力を頂きました多くの機関、関係者の皆様に深く感謝の意を表する次第です。

令和5年2月26日

公益財団法人 和歌山県文化財センター 理事長 櫻井敏雄

## 地宝のひびき ―和歌山県内文化財調査報告会 2022― 開催日程・目次

**開催日時** 令和 5 年 2 月 26 日 (日) 13 時 30 分~16 時 40 分

会 場 田辺市文化交流センターたなべる大会議室 田辺市東陽 31 番 1 報告内容

(13 時 00 分 受付開始 13 時 30 分 開会挨拶)

13 時 40 分 報告 1 「入郷遺跡の発掘調査

ー中国製磁器の出土する中世集落跡の調査ー」・・・・・・・・2 (公財)和歌山県文化財センター 田之上 裕子

14 時 20 分 報告 2 「岩橋千塚古墳群 寺内 18 号墳

- 発掘された前方後円墳の埴輪列と土器埋納遺構 - 」・・・・・・・4

和歌山県教育委員会 瀬谷 今日子

(15 時 00 分 休憩 10 分)

15 時 10 分 報告 3 「小浦」遺跡及び小浦Ⅱ遺跡の発掘調査

-製塩土器と土錘を中心に-」・・・・・・・・・・・・・6

(公財) 和歌山県文化財センター 濵﨑 範子

15 時 50 分 報告 4 「社殿にみる神社創建と熊野信仰の歴史

(公財) 和歌山県文化財センター 下津 健太朗

(16 時 30 分 閉会挨拶)

#### 誌上報告

「深山砲台・勇良谷砲台の発掘調査ー明治期の沿岸要塞 由良要塞跡を掘る一」・・・・・・・・10 和歌山県教育委員会 山本 光俊

「亀川遺跡発掘調査成果について一刀子型石製模造品と祭祀遺構一」・・・・・・・12

海南市教育委員会 鈴木 周

「新たに見つかった中世太田環濠集落をめぐる堀-太田・黒田遺跡第 97・98 次発掘調査」・・・・14 (公財) 和歌山市文化スポーツ振興財団 藤藪 勝則

- 1. 本書は公益財団法人和歌山県文化財センターが開催した『地宝のひびきー和歌山県内文化財調査報告会 2022 』の報告資料集である。
- 2. 本書掲載資料の中には、正式な報告書が刊行されていないものが含まれているため、今後各資料の位置付けが変更される可能性がある。
- 3. 本報告会を開催するにあたり、田辺市教育委員会及び田辺市文化交流センターをはじめ、県内各自治体の文化財関係部局・担当課等から多大なるご協力を得た。記して謝意を表す次第である。
- 4. 本書の編集は、仲原知之(公益財団法人和歌山県文化財センター)が担当した。

## 入郷遺跡の発掘調査

- 中国製磁器の出土する中世集落跡の調査-

(公財) 和歌山県文化財センター 田之上 裕子

#### 1. はじめに

入郷遺跡は、伊都郡九度山町入郷に所在 し、紀の川の浸食により造られた台地上 に立地している。今回の調査地は本遺跡 の西辺にあたる。かつて、貯水場建設工 事の際に、縄文時代の石鏃などのサヌカ イト製石製品を中心に発見された散布地 で、縄文土器片などは確認されていない。



図2 入郷遺跡の位置

#### 2. 調査成果

令和3年度の調査では、掘立柱建物跡、中世土器が多く出土した土坑、カマド跡、 土師器皿を使った灯明皿が出土した柱穴跡などの中世の人々が生活した痕跡(遺構) が見つかった。また、普通の集落跡でみられるような生活雑器である土師器皿や瓦器 碗、土師質羽釜などが多く出土している一方で、当時の高級品である中国製の連弁文 青磁碗や白磁皿の破片が十数点出土した。この他、一つの土坑から滑石製石鍋の破片 が2点出土している。割れてしまった石鍋片を温石(石を温めて使用するカイロ)に 再加工している。

#### 3. まとめ

入郷遺跡は、紀の川と大和街道を一望できる台地上に立地し、高野山や慈尊院にも近くに位置している。当時、高級品であった中国製の青磁碗や白磁皿、滑石製石鍋が出土していることから、一般的な集落とは違う階層の人々が生活していたと考えられる。

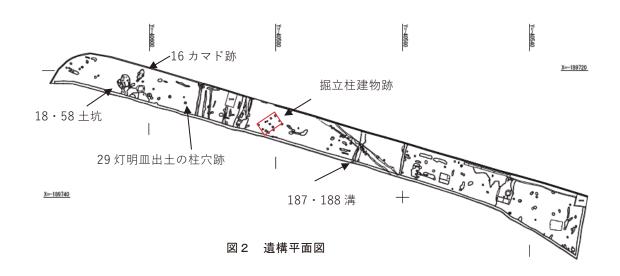




写真1 調査区全景(南上空から)



写真 2 調査区全景(東上空から)



写真3 掘立柱建物跡(北西から)



写真 4 16 カマド跡検出状況(南から)



写真 5 青磁碗などが出土した 58 土坑 (北から)



写真6 灯明皿が出土した29柱穴跡(西から)



写真7 温石に再加工された滑石製石鍋





写真8 青磁碗・白磁皿

## 岩橋千塚古墳群 寺内 18 号墳

一発掘された前方後円墳の埴輪列と土器埋納遺構ー

和歌山県教育委員会 瀬谷 今日子

### 1. はじめに

岩橋千塚古墳群は和歌 山市東部の岩橋丘陵を中 心に、南北約 3.3 km、東 西約 4 kmの範囲に、古墳 時代前期末から終末期ま で(西暦 4 世紀末から 7 世紀まで)、約900基の古 墳が築造された古墳群で ある。

寺内 18 号墳は、岩橋千

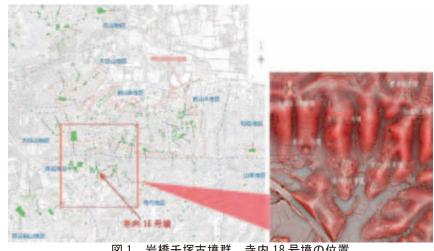


図1 岩橋千塚古墳群 寺内 18 号墳の位置

塚古墳群の寺内地区に所在する古墳時代後期(6世紀前半)古墳で、寺内地区では唯 一の前方後円墳である。昭和 40 年に関西大学考古学研究室によって、埋葬施設の発 掘調査が行われ、前方部と後円部に横穴式石室をもち、後円部の墳丘及び墳頂に埴輪 列が巡っていたことが確認されている。令和3年度は、墳丘の規模や構造を明らかに するため前方部を中心に発掘調査を実施した。

#### 2. 調査成果

調査の結果、寺内 18 号墳は基壇を含む全長 31mの前方後円墳で、墳丘は1段築成 と考えられ、墳丘の大部分は地山(岩盤)を削り成形していることが判明した。

前方部では、墳丘裾に造られた平坦面(基壇)上に円筒埴輪と石見型埴輪からなる

埴輪列を確認した。さらに、埴輪列より墳丘 側の空間には、据え置かれた須恵器大甕と、 18点の土器を土坑内に配置した土器埋納遺構 を検出した。

墳丘からは人物埴輪片や家形埴輪片も出土 し、円筒埴輪の他に、多様な形象埴輪群がた て並べられていたことが明らかになった。

#### 3. まとめ

墳丘の規模や構造に加えて、須恵器大甕や 土器埋納遺構の発見により、古墳時代後期に 寺内地区に築かれた前方後円墳において行わ れていた儀礼の一端が明らかとなった。

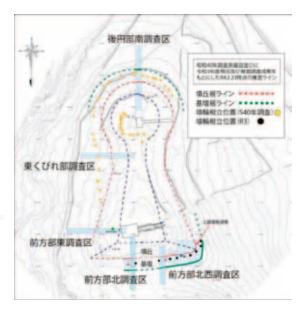


図2 寺内18号墳墳丘測量図及び調査区配置図



写真1 前方部埴輪列・大甕・土器埋納遺構検出状況



写真2 前方部北西 土器埋納遺構検出状況



写真3 前方部円筒埴輪·須恵器大甕検出状況



写真4 東くびれ部 盛土及び岩盤検出状況



写真5 後円部 墳丘検出状況

## 小浦Ⅰ遺跡及び小浦Ⅱ遺跡の発掘調査

-製塩土器と土錘を中心に-

(公財) 和歌山県文化財センター 濵﨑 範子

#### 1. はじめに

小浦 I 遺跡及び小浦 II 遺跡は日高郡日 高町小浦に所在し、小浦湾に面した砂堆 及び背後にある後背湿地上に位置する。 調査地の現況は水田であり、過去には昭 和 58・60 年度に県道拡幅事業に伴い、今 調査区の南部で発掘調査が行われている。

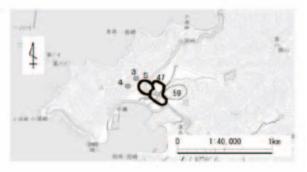


図1 小浦Ⅰ遺跡(5)及び小浦Ⅱ遺跡(47)の位置

#### 2. 調査成果

令和3年度の調査では、小浦 I 遺跡及び小浦 II 遺跡の北側で行われ、弥生時代末から古墳時代前期の遺構面を確認し、土坑・小穴・落込み状遺構などを確認した。しかし、いずれも遺存状況は悪く、出土遺物も多くない。竪穴住居跡や柱穴等も確認できなかったこと、遺構面及びその上部土層がシルト質で水はけが非常に悪いことから、遺跡北側は住居域ではなかった可能性が高い。2区では18土坑の埋土から多数の土器片の他骨片1点が出土しており、土壙墓であった可能性がある。また26土坑からは弥生時代末から古墳時代初頭の土器類が多数出土している。

今回の調査では遺構面は確認できなかったが、両遺跡の包含層から中世の瓦器椀や皿、中国製の青磁碗片などが一定数出土しており、今回の調査地南で行われた既往調査の東側地区で中世とみられる遺構面が確認されたことも含めて、小浦Ⅱ遺跡南部では本来中世の遺構面も存在していたと考えられる。今回の調査区で中世の遺構面が確認できなかったのは後世の開発行為等により削平された結果と推定できる。

出土遺物は弥生時代末から古墳時代初頭の土師器壷、甕等があるほか、東海地方の尾張産とみられる弥生土器片が1点確認されている。また遺構・包含層から一定数の製塩土器と土錘が出土している。製塩土器は脚台式Ⅲ式とⅣ式を中心として少数だがⅠ式・Ⅱ式とみられるものが確認できる。土錘は奈良時代から平安時代と見られる有溝土錘の他は弥生時代後期から古墳時代中期ごろとみられる有孔土錘、管状土錘の3種が出土しており、量的には管状土錘が多数を占める。大型のものは少なく、全長4~6cm程度、内孔径は2~3mmのものが多い。これらは漁労や製塩活動を裏付けるものであり、小浦Ⅰ遺跡及び小浦Ⅱ遺跡の性格を表す遺物と考えられる。一方で製塩炉など生産遺構を今回の調査では確認できておらず、集落や製塩作業の中心は現在の小浦地区の集落がある遺跡南側と推定される。

## <u>3.</u> まとめ

今回の発掘調査では、製塩土器が出土したものの生産遺構が確認できなかった。た

だし、出土した製塩土器の外面には製塩時における二次焼成の痕跡が確認でき、遺跡 内で製塩活動が行われていたことは間違いない。小浦Ⅰ遺跡及び小浦Ⅱ遺跡では弥生 時代末から古墳時代初頭にかけて本格的な製塩活動が始まったことが明らかとなり、 日高郡北部における製塩活動開始時期を考える上で貴重な資料を得ることができた。

また尾張産の弥生土器が1点出土したことなどから古くから交通による人的・物的 交流が行われていた可能性が高いことも明らかとなった。



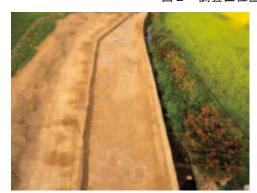


写真 1 2区北半部全景(北から)



写真 2 26 土坑遺物出土状況 (西から)

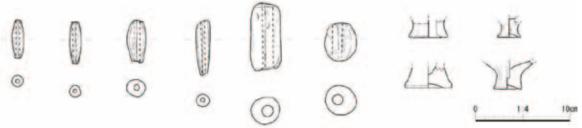


図3 小浦Ⅰ遺跡・小浦Ⅱ遺跡出土遺物(土錘と製塩土器)

## 社殿にみる神社創建と熊野信仰の歴史

- 鬪雞神社の建造物修理 -

(公財) 和歌山県文化財センター 下津 健太朗

#### 1. 神社の概要

田辺市に所在する鬪雞神社は、創建千六百年以上と 歴史のある神社である。田辺湾内の神島(加志魔)からの龍神信仰を由緒とし、平安後期には熊野三所権現を勧請したことから「新熊野権現社」と呼ばれるようになり、源平合戦の折に執り行われた「鶏合せ」神事を契機に「鶏合権現社」「鬪雞宮」等とも称されながら、明治初年に「鬪雞神社」と改称して現在に至る。



写真1 一列に並ぶ社殿群を西から見る

現在の社殿群(6棟)は、室町時代と戦国時代に二度の焼失・荒廃後、17世紀中頃から18世紀中頃にかけて再建されて来た建物になる。大斎原時代(明治中期以前)の熊野本宮大社の社殿構成を現代に留め、熊野地方の建築的特徴をよく伝える点等も評価され、平成29年2月には国指定重要文化財となった。境内も、同27年に「南方曼陀羅の風景地」の構成要素として国名勝指定、同28年には「熊野参詣道(大辺路)」の構成要素として世界遺産登録を受けている。

#### 2. 保存修理事業の概要

令和2年度から4年度にかけて、本殿と上殿の2棟では、檜皮屋根の葺き替え時期に合わせて、木部の広範囲に生じた蟻害による破損箇所を健全にするため、軒までを分解しながら軸組の歪みを直したり破損部材の取り替えを行った。分解中に行った塗装調査では両殿とも、360年前に再建された当初のすがた、江戸後期までに塗り替えられた第2期のすがた、明治期に塗り替えられた修理前までのすがた、の3つに整理できた。明治期の彩色は、江戸後期(第2期)の施工面の上に重ねて描かれ、その後100年以上修理が行われなかったため塗膜の劣化・剥落が進み、全容も把握できなかった。一方、その下層に存在した江戸後期の様相は、塗膜片や木肌の風食具合などからおよそ全容が確認できた。そこで今回の塗装修理は、国・県・市との協議や地元住民への見学説明会を経て、関係者の総意のもと江戸後期頃の外観に復旧する方針で実施した。現在の社殿が揃った18世紀後半頃の景観がよみがえったことになる。



写真2 軒廻り・小屋組解体中の本殿



写真3 塗装・彩色施工中の上殿

#### 3. 調査成果の紹介

今回修理の中心となった本殿(寛文元年・1661)と上殿(明暦4年・1658)に配され た彫刻の題材を整理することで、360年前の田辺における新熊野権現社の存在、当時 の民衆の信仰や熊野との関係などうかがい知れた内容を紹介する。本殿の彫刻画題は、 紀州藩付家老であった田辺領主・安藤氏の家紋「下がり藤」を中央に置き、4代・直清 公の寄進であることを示す。その周りには「蓬莱山(仙人の住む地)」の要素を分解 して配する。屋根の正面には菊と桐の彫刻を組み合せ、修験道との関係の大きさを伝 える。一方、氏子衆の尽力で再建された上殿では、中央に「龍(神)」を据え、その近 くには「鶏合せ」神事や「源頼政の鵺退治」といった、熊野水軍が源氏方へ加勢する 経緯を伝える題材を並べ置く。その脇には「梅・鶯」の彫刻も据える。この4つの彫 刻は本殿前方から見える位置に配されて、そこには神社の由緒や当地方で梅の栽培を 推奨した初代・直次公への崇敬を示したと考えられる。なお、上殿の「梅・鶯」と向 き合う本殿側の彫刻には「橘」が置かれ、社殿背後の仮庵山からは「右近の橘・左近 の梅」の構成ともなっており、両殿の彫刻の配置に籠められた意図は奥深そうである。



図1 本殿(左)と上殿(右)に配された彫刻の題材(図の下方が正面(北)側、背後に仮庵山が存在する)



写真4 本殿の全景を北東から見る



写真5 本殿前から見た上殿と由緒に関わる4つの彫刻

## 深山砲台・男良谷砲台の発掘調査

一明治期の沿岸要塞 由良要塞跡を掘るー

和歌山県教育委員会 山本 光俊

#### 1. はじめに

深山砲台・男良谷砲台は、和歌山市深山に 所在し、大阪湾と紀伊水道の境である紀淡海 峡に面し、和泉山脈の西端に立地している。 紀淡海峡には大阪湾防衛の目的のため明治期 に造られた由良要塞跡があり、深山砲台・男 良谷砲台は要塞を構成する砲台の一つである。



#### 2. 調査成果

和歌山県教育委員会では、近代の文化遺産調査の一環として、和歌山県における近 代の軍事遺産であり、残存状態が良く、これまで発掘調査が行われていなかった深山 第1砲台跡・男良谷砲台跡を発掘調査した。深山第1砲台跡では、右翼と左翼で調査 を行った。右翼では十五糎臼砲(せんちきゅうほう)の砲座を確認し、左翼では二十八糎榴弾 砲(せんちりゅうだんほう)の砲座を確認し、砲を固定していた痕跡も確認した。十五糎臼砲 の砲座からは座金が 1 点出土している。男良谷砲台跡では、斯加式(しかしき)十二糎速 射加農砲(せんちそくしゃかのんほう)の砲座を2基確認し、砲を固定していた痕跡も確認した。

#### 3. まとめ

これまで資料などで、それぞれの砲台にどの種類の砲が設置されていたのかは知ら れていたが、発掘調査によって砲座を確認し、資料に記載されている砲と同じ種類の 基礎を確認した。





写真1 深山第1砲台跡 十五糎臼砲の砲座



写真3 十五糎臼砲の砲座 底部



写真 5 男良谷砲台跡 斯加式十二糎速射加農砲 砲座 1



写真2 十五糎臼砲の砲座 ボルト検出



写真 4 深山第 1 砲台跡 二十八糎榴弾砲の砲座

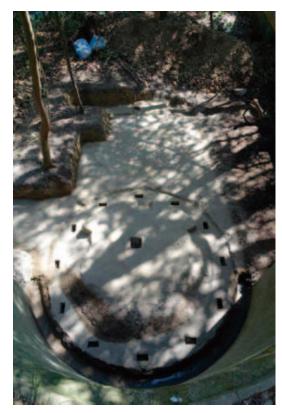


写真 6 男良谷砲台跡 斯加式十二糎速射加農砲 砲座 2

## 亀川遺跡発掘調査成果について

- 刀子型石製模造品と祭祀遺構-

海南市教育委員会 鈴木 周

#### 1. はじめに

亀川遺跡は、海南市北部を流れる 亀ノ川によって形成された平野で の入り口に位置しており、これまで に実施された調査では、竪穴建物跡 や方形周溝墓などを検出、主に弥生 時代~古墳時代頃を中心にした各 種土器、サヌカイトの剥片や石鏃、 石錘なども多く出土している。これ らの成果は、亀川遺跡の中央から東 にかけての地区におけるものであり、今回、発掘調査を実施した地点 周辺は、これまでの調査では遺構等 は確認できていないため、集落の外 縁部と考えられている。

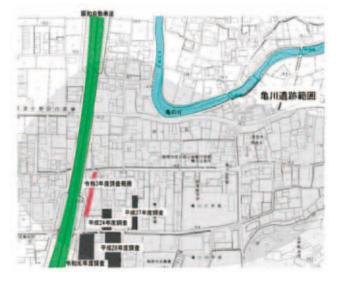


図 1 周辺調査位置図

#### 2. 調査成果

令和3年度の調査は1区と2区に分けて行った。今回紹介するのは1区のものである。遺構は大型土坑を検出しており、大型土坑の埋土にブロック状に焼土、炭化物が混じるのを確認した。遺物は大型土坑から大量の土師器片などが出土している。特に高坏の破片が多く、土坑内のほぼ一か所に坏部分が下を向いて積み重なるようにして出土した。その中には須恵器の坏も1点あり、その下に土師器片も堆積していた。

これらの遺物洗浄作業中、壺の頚部に詰まった土の中から刀子型石製模造品が1点確認された。確認した刀子型石製模造品はやや緑がかった滑石製、長辺で5.8 cm、短辺で2.5 cm、厚さ0.7 cmの鞘入の形態である。成形するにあたり、ほぼ片面だけを削っているようで、痕跡は片面に集中している。同じ層から出土した土師器には布留式(3~5世紀頃)の特徴が見受けられるものが多いため、刀子型石製模造品も同年代のものと考えられる。

#### 3. おわりに

大型土坑の埋土の一部に焼土がブロック状に混じった層を確認しており、火を用いていたと考えられることや、高坏片がまとまって出土していること、刀子型石製模造品が出土したことなどから祭祀遺構と考える。

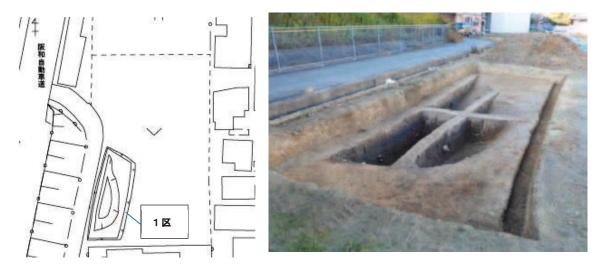


図2 左:調査位置図 右:大型土坑(南西より撮影)



図3 土器出土状況(左:南より撮影 右:東より撮影)

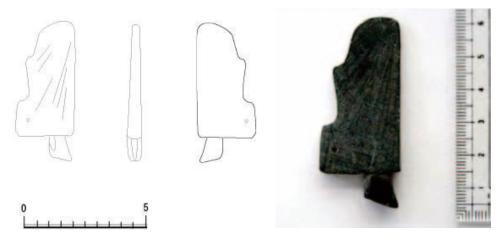


図4 刀子型石製品(左:実測図 右:写真)

## 新たに見つかった中世太田環濠集落をめぐる堀

太田·黒田遺跡第 97·98 次発掘調査-

(公財) 和歌山市文化スポーツ振興財団 藤藪勝則

#### 1. はじめに

太田・黒田遺跡は、紀の川河口南岸に営まれた弥生時代前期以降の集落遺跡である。またその南半は、天正 13 年(1585)に紀州を平定した羽柴秀吉により水攻めが行われた太田城の有力な推定地でもある。太田城の所在地や秀吉が水攻めを行うために築いた堤は、地形分類をもとにした歴史地理学的考察、また同時代史料とされる『紀州御発向之事』や江戸時代に編纂された地誌書及び軍記などの文献史料や絵図、さらに明治時代の地籍図や字限図から復元されてきた。

特に近年では、太田・黒田遺跡の発掘調査で検出された室町時代後期の遺構及び出土遺物、太田城推定地の周囲をめぐる大溝(堀)、和歌山市出水に残る水攻め堤の調査とその推定地近辺で検出された大規模な土取りの痕跡など、考古学的検討も加えてより具体的な太田城と水攻め堤の姿が明らかとなりつつある。

太田城は、現在、各分野からの諸検討によって中世環濠集落が城塞化したものとされている。その根拠のひとつが、太田・黒田遺跡のいくつかの発掘調査地点で検出されている室町時代後期の大溝である(図1)。そして注目するべきことに、その位置は、2008年に岩本茉莉氏が明治時代の地籍図及び字限図の分析をもとに、太田村の景観復元を行った太田村地籍図集成図にある明治時代の水路位置と重なっている。

明治時代の水路をそのまま中世環濠集落の濠とすることはできないが、太田村の周囲には用水や排水のために大溝が掘削されており、そのいくつかは明治時代にも踏襲されている。今回発掘調査を行った97次・98次調査においても、岩本氏が復元した明治時代水路の前身と考えられる大溝を検出した。そこでこの大溝が、太田環濠集落



図1 太田・黒田遺跡の大溝検出位置図(破線は岩本2008復元の明治時代の水路、数字は調査次数)

の濠または太田城の堀の位置及び範囲を復元するうえで重要な事例となることから 調査の様子を紹介しておきたい。

#### 2. 調査成果

97次調査地は、推定太田環濠集落の北端を東西に延びる明治時代水路の西半、5次調査地点の東側に位置する。調査では、調査区の南端で北西から南東に延びる大溝 (1-SD) の北側肩部を検出した。この大溝は5次調査地でもその延長部分が検出されている。規模は幅約10m、深さは最深部で検出面から1.8mを測る。埋土は大きく3つに分けことができ、上層及び中層は明治時代や江戸時代に掘削された水路の埋土、下層は室町時代後期に掘削された大溝の埋土である。下層には、室町時代後期から江戸時代にかけての備前焼の擂鉢や大甕、一石五輪塔、鉄鏃、中層には江戸時代中期の肥前染付磁器、上層には明治時代以降の遺物が含まれていた(写真4)。各水路の規模は、明治時代の水路は、幅約1.5~2.0m、深さ約0.45m、江戸時代の水路は幅約5.6m、深さ約1.0mを測る(写真1)。この大溝の興味深い特徴は、室町時代後期に機能した溝底面の形状が、集落側(南側)に深く、北側に向かって階段状に浅くなり、大小の凹凸が顕著にみられることである(写真2・3)。和歌山県内では、15世紀中頃以降に機能した岩橋荘湯橋氏の居館を囲む大溝(幅約10.5m)及び、16世紀中頃から後期に機能した岩橋荘湯橋氏の居館を囲む大溝(幅約10.5m)及び、16世紀中頃から後期に機能した鷺森本願寺を囲む堀(幅約16.9m)の底面の形状と類似する。よって、中世後期に防御を目的に掘削された堀などに採用された工法と考える。

98 次調査地は、太田環濠集落の南西部に位置する。調査では、南北方向に延びる幅2.0m以上、深さ1.4mの溝(39-SD)と、39-SDに直交し東西方向に延びると想定される幅4.5m、深さ1.2mの溝(75-SD)が検出されている(写真5・6)。これらの埋土は大きく2つに分けられ、下層は砂層を挟む粘土~シルト、上層がシルトブロックを含む人為的な埋土である(写真7)。遺構埋土には、瀬戸灰釉折縁菊皿、備前焼の擂鉢や大甕、中世瓦(軒瓦)が含まれていることから、ともに同時期に機能した16世紀後半の溝と考える(写真8)。

#### 3. まとめ

今回検出した大溝のうち 97 次調査 1-SD は、その規模や底面の形状から 16 世紀後半の堀とみられるもので、天正 13 年(1585)に秀吉により水攻めされた太田城の堀となる可能性が高い。この堀は、その後江戸時代から明治時代にかけて水路として機能していることから、その前身は太田環濠集落の濠であった可能性もある。また 98 次調査 39・75-SD は、規模や形状、また埋土の状況から水路または屋敷地をめぐる区画溝と考えられる。太田環濠集落と太田城の位置や範囲を復元するうえで、岩本氏が示す明治時代の水路の位置は参考となる。今後は、検出された大溝の形状及び埋土の調査所見から、その性格を精査することで太田環濠集落の城塞化への過程を考察していくことが可能と考える。

参考文献:岩本茉莉 2008 「字限図による太田村の景観復元」 『和歌山地方史研究第 54 号』 和歌山地方史研究会



写真 1 97 次調査 1-SD 明治時代水路(南東から)



写真3 97次調査1-SD 大溝底面(南東から)



写真 5 98 次調査 75-SD 大溝 (西から)



写真7 98 次調査 75-SD 埋土 (東から)



写真 2 97 次調査 1-SD 大溝(北西から)



写真 4 97 次調査 1-SD 出土遺物 (北西から)



写真6 98次調査39-SD 大溝(南から)



写真 8 98 次調査 75-SD 出土遺物(南から)



鬪雞神社本殿 (保存修理後)



入郷遺跡 白磁皿

#### 【連動企画】

「紀州のあゆみ」(和歌山県内文化財調査成果展) 開催中

令和 5 年 1/28 (1) ~ 3/5 (1)

田辺市立歴史民俗資料館企画展示室

- 主 催 公益財団法人和歌山県文化財センター (http://www.wabunse.or.jp/)
- 協 力 田辺市立歴史民俗資料館
- 後 援 和歌山県教育委員会、田辺市教育委員会、海南市教育委員会、紀の川市教育委員会、 有田市教育委員会、九度山町教育委員会、日高町教育委員会、すさみ町教育委員会(順不同)

## 「地宝のひびきー和歌山県内文化財調査報告会 2022ー報告資料集



発行日 令和5 (2023) 年2月26日 発 行 公益財団法人 和歌山県文化財センター 〒640-8301 和歌山市岩橋 1263 番地の 1 TEL 073-472-3710 FAX 073-474-2270 E-mail maizou-1@wabunse.or.jp ホームページ http://www.wabunse.or.jp/



公益財団法人 和歌山県文化財センター